



第3幕 ザックス、ワルター(クラウス・フロリアン・フォークト)

第2幕 ベックメッサー(ヨハネス・マルティン・クレンツレ)、ザックス(ミヒャエル・フォッレ)

第1幕 エヴァ(アンネ・シュヴァーネヴィルムス)、ワルター、ザックス、ワグナーの子ども(黙役)

第3幕 バイロイト音楽祭合唱団ほか

第1幕 ワルター、ダヴィド(ダニエル・ペーレ)、ザックス、バイロイト音楽祭合唱団ほか

## 『ニュルンベルクのマイスタージンガー』はワグナーの夢物語？

中 東生(音楽ジャーナリスト)

ワグナーの聖地バイロイトの祝祭歌劇場は、ワグナー自身がオペラを上演するためにルードヴィッヒ2世に建てさせたため、現在の私たちには古く、狭く、椅子も硬いが、ワグナーの息吹は至る所に感じられる。そしてこの「ニュルンベルクのマイスタージンガー」は舞台上もワグナーで溢れていた。

バリー・コスキーの演出は、ワグナーがハウスコンサートでこのオペラを上演するという設定で、ハンス・ザックスはワグナー自身、エヴァはコジマワグナーの妻ならば、ファイト・ボグナーはリスト、とそこまではついでいけるが、ワルター・フォン・シュトルツィングも、子どもたちもみなワグナーの化身なのだという。

幕が開くとワグナーのバイロイトの家、ヴァーンフリードが舞台となっており、タイトルのニュルンベルクは実際の街の名ではなく、ワグナーが夢想した桃源郷、という解釈だ。所狭しと人が出たり入ったりする演出は楽しめるものの、せわしなくて序曲に集中できない。そのためか、フィリップ・ヨルダンの指揮は、多少乱れながら始まった序曲を細やかに統率しながら、ワグナーの音のバスルをはめ込んでいくような音楽作りだが、ワグナーの音楽の太い根幹は感じ取れない。ようやく三幕でそれが大きく裂けた時には、細やかさを維持したままワグナーパワーも得られ、これがヨルダンの意図するところだったのかもしれないと、一応納得させられた。

### バイロイト音楽祭『ニュルンベルクのマイスタージンガー』

8月27日 バイロイト祝祭歌劇場 所見

キャストは、まずハンス・ザックスのミヒャエル・フォッレの完成度がうれしい驚きだった。10年以上前から注目はしていたが、ワグナー楽劇中で1番出番が長いと言われるこの役を、常に生き生きと、歌詞も明瞭に聴かせた。最後はさすがに声に疲れが感じられたが、あれだけ全てに全力投球すれば仕方ないことだろう。ワルターのクラウス・フロリアン・フォークトも最初から最後まで透明な美しい響きを聴かせ、栄冠の歌では完璧な「マイスタージンガー」ぶりに聴きほれた。彼の末っ子がワグナーの息子(黙役)を演じたのも、観客を微笑ませた。マグダレーネのヴィーベケ・レームクルはどんな役を歌わせても光る歌唱力があるのだが、ここではそれがより顕著で、ヒロインのエヴァを歌うアンネ・シュヴァーネヴィルムスは、彼女だけが女声を担うアンサンブルでは聴けるものの、レームクルが混ざると音痴に聞こえてしまうほど、歌唱テクニクの差が露見された。その他、ボグナーのギユンター・グロースベック、ベックメッサーのヨハネス・マルティン・クレンツレ、ダヴィドのダニエル・ペーレ等全てのキャストが実力派でかつ、楽しんで演じている様子が客席をより沸かせた。

2017年7月25、28日、8月5、11、17、21、27日  
指揮/フィリップ・ヨルダン  
演出/バリー・コスキー  
合唱/祝祭合唱団  
管弦楽/祝祭管弦楽団

©バイロイト音楽祭 Enrico Nawrath